

管し羽化脱出したもので、後者は神社脇の粗朶置き場のピーティングで採集したものである。

本種は、本州産と九州産では前胸背や上翅の形態などに違いがあることが知られている(新里, 2007)。手元にある東京都産および佐賀県産の標本と愛知県産の標本を比較したところ、前胸背などの特徴は東京都産のものと同様であった。

中京圏は、京浜、阪神には及ばずとも多くの昆虫研究者が在住しており、その中でも愛知県は、カミキリムシ相が比較的良く調べられてきた地域である。特に愛知県のカミキリムシ相解明の気運が高まった1970年代から80年代にかけては熱心に調べられ、京浜、阪神地域に分布しているながら、中京圏での記録がなかった本種は、注意が払われて探索された種のひとつであった。こうした背景に加え、成虫が強い走光性を示し、幼虫の加害木も比較的発見しやすい本種が、これまで発見されてこなかったことは、最近になって本種が他地域から移入された可能性を示唆している。今後、中京圏での動態を注視すべきであろう。

#### 引用文献

新里達也, 2007. カミキリ亜科, pp. 252-281, 424-512. 大林延夫・新里達也 (共編), 日本産カミキリムシ, 818 pp. 東海大学出版会.

(小西宏明 470-0154 愛知県東郷町和合ヶ丘3-2-15)  
(長谷川道明 441-3147 豊橋市大岩町字大穴1-238 豊橋市自然史博物館)



図1. テツイロヒメカミキリ (愛知県産)。

#### 【短報】トカラ列島小宝島におけるタマムシ科の採集記録

筆者は、2011年7月にトカラ列島小宝島を訪れ、タマムシ類の調査をすることができたので、その結果を報告する。報告に先立ち、今回のトカラ列島での調査・採集の許可を頂いた十島村役場の方々、および親切にご協力頂いた島民の方々に感謝申し上げる。

秋山・大桃(1997)の日本産タマムシ科チェックリスト、およびその後の筆者の知見でも、これまで小宝島におけるタマムシ科の採集記録はないと思われる。訪れた小宝島は植生が貧弱で、シイやカシの木の類は見当たらず、トカラ列島では普通に見られるヤクシマクリタマムシやクリタマムシ(服部, 2010a, b)なども得られなかった。唯一採集できたのは、やっと見つけたマツから得られたウバタマムシ1種であった。

ウバタマムシ宝島亜種 *Chalcophora japonica takarajimana* Y. Kurosawa, 1974 (図1)

2♂♂, 鹿児島県鹿児島郡十島村小宝島, 3-5. vii. 2011, 筆者採集.

小宝島のウバタマムシは、渡瀬線よりも北、悪石島以北の日本各地に分布する名義タイプ亜種 *C. japonica japonica* に比べて隆線が強く隆起しており、かつ背面の光沢が強い点で宝島亜種 *C. j. takarajimana* と同定した。Kurosawa (1974) によれば、宝島亜種は、鞘翅の縦隆線間に不明瞭な小隆線が存在すること、および縦隆線間の点刻は密ではないという特徴をもつことで名義亜種や台湾亜種のグループに属し、奄美・沖縄亜種 *C. j. ohshimana* (アオウバタマムシ) とは明瞭に区別されると言う。

しかし、今回得られた小宝島の個体は、宝島産の個体に比べて太短く、色彩も宝島産は背面全体が銅赤色または緑色の光沢を持つ個体が多いのに対して、小宝島の個体は背面の光沢がより強く、前胸背の中央部分が赤銅色の光沢を持ち、鞘翅は体軸と並行な光に対して緑色の光沢を持つ。これらの色彩的特長はむしろ奄美・沖縄亜種に近い。



図1. ウバタマムシ宝島亜種♂ (小宝島産)。

さらに、宝島産の一部の個体は、光沢は弱いものの小宝島の個体と同様の色彩的特徴を備えていることから、宝島亜種は名義タイプ亜種と奄美・沖縄亜種の両方の特徴を備えていると思われる。

#### 引用文献

Kurosawa, Y. 1974. A revision of the East Asian species of the genus *Chalcophora* (Coleoptera, Buprestidae), with special reference to their distribution and differentiation. Mem. Natn. Sci. Mus., Tokyo, 7: 169–192, pl.19.

秋山黄洋・大桃定洋, 1997. 日本産タマムシ科チェックリスト. 月刊むし Supplement (1): 10–11.

服部宇春, 2010a. トカラ列島悪石島でのタマムシ科の採集記録 (1). 甲虫ニュース, 169: 4.

服部宇春, 2010b. トカラ列島口之島でのタマムシ科の採集記録 (1). 甲虫ニュース, 170: 21.

(服部宇春 横浜市)

#### 【短報】ニッポンセスジダルマガムシを関東内陸部で発見

日本産のセスジダルマガムシ属 *Ochthebius* Leach, 1815 は、吉富ほか (2000) により、それまでの知見等が整理され、全国各地でこの属を調査、記録するにあたっての基礎資料として大変有用なものとなっている。その資料によれば、ニッポンセスジダルマガムシ *O. nipponicus* Jäch, 1998 は静岡県伊豆半島須崎の海岸部から、友国雅章博士により2個体が採集されたのみで、その時点では生態的知見が全く知られていない種であると述べている。その後の調査成果により、福島県、茨城県、千葉県、静岡県、沖縄県といった各地の海岸環境で、岸壁を流れ落ちる淡水中にこの種が生息することが確認されたと、菅谷 (2009) によって報じられているが、いずれも海沿いから知られるのみであった。

筆者はこの度、海岸線から遠く離れた関東地方の内陸部である埼玉県秩父市において、本種の生息地を発見したので報告する。

筆者はこの度、海岸線から遠く離れた関東地方の内陸部である埼玉県秩父市において、本種の生息地を発見したので報告する。

10 exs., 埼玉県秩父市久那 荒川本流の左岸, 27. VII. 2009; 10 exs., 同所, 1. VIII. 2009, いずれも筆者採集, 愛媛大学ミュージアムならびに筆者保



図1. 秩父市産のニッポンセスジダルマガムシ.



図2. 生息地の概観.



図3. 湧水の染み出している箇所.

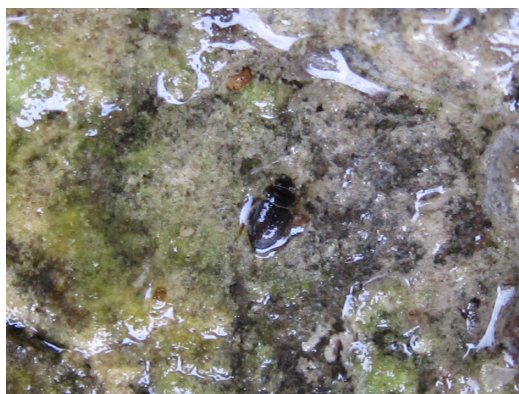


図4. 岩の表面のニッポンセスジダルマガムシ.

管 (図1).

本種の生息が確認されたのは、秩父盆地の中央を東へ蛇行しながら流れる荒川の中流域で、人為的な改変の行なわれていない巨大な岸壁の下部である (図2). この場所では、岩盤から湧水が染み出し、年中湿っている箇所がある (図3). こうした環境を好むと考えられるコマルシジミガムシ *Laccobius masataakai* Kamite et al., 2007, あるいはコモシジミガムシ *L. oscillans* Sharp, 1884 といったシジミガムシ属 *Laccobius* Erichson, 1837 (ガムシ科)